

## 富山県臨床心理士会

### モデル事業を受け取るまで

富山県臨床心理士会は、現在の会員数140名あまりの小規模所帯です。当会員対象の、地域子ども・子育て支援活動調査によると、①市町村保健所での1歳半・3歳児健診、②富山県家庭教育カウンセラー、③継続的な保育事例研修会への講師、④保育園・幼稚園での（保育）カウンセラー、⑤市内全保育所・幼稚園への巡回、⑥要保護児童対策（虐待防止）活動、⑦児童発達支援事業⑧家族再統合支援事業、⑨産前産後のうつ対策事業などに関与しています。

専門家としての力量を地域に認めてもらいながら、一歩一歩地道に職場を開拓してきた流れの中で、2010年から、「ハートフル保育専門アドバイザー派遣モデル事業」が始まりました。「保育カウンセラー（臨床心理士）が発達障害等の保育を行う保育所等を訪問し、『気になる子』等対応の困難な子ども把握、支援方法について、保育士等に対する専門的助言等を行う」という県からの要望に応え、新設の福祉担当理事が中心になって、保育士の子どもへの対応力の向上が目指され

ました。「支援シート」を使いながら「①子どもの行動観察を行い、②気になる行動が起る要因や仕組みを理解し、③一人ひとりの子どもにあった支援方法を協議する」という手順で話し合いを重ねました。また保育士に寄り添いながら、一方的にならないように配慮された助言を心掛けていたので、訪問先では好評を得ていたようです。

2017年にはモデル事業の枠がはずれ、ハートフル保育カウンセラー派遣事業」と改名され、乳幼児期から学童期までに対象が広がりました。2018年現在、保育所17か所、放課後児童クラブ22か所に臨床心理士が訪問していますが、各施設のニーズに応えることを優先しているので、活動内容は訪問者の裁量にゆだねられています。現場で真に役に立つ仕事をするためには、本事業参加者同士の繋がりと学びを深めることが必須なので定期的な研修会を持っています。また、より複雑な事例に出会った場合は、他機関多職種と連携をとることも視野に入れています。

### 放課後児童クラブでの実際

この事業を展開する中で、放課後児童クラ

には、先手を打って環境を調整していく対応が基本ですが、この児童クラブにおいて、Aくんと彼を取り囲む子どもたちへの対応は、現状の環境に子どもたちが折り合いをつけて合わせていく、そのような体験の積み重ねとなっていきました。

このように活動をされている指導員の方々に対し、派遣された臨床心理士は、Aくんをはじめとした子どもたちの言動の見立てを伝え、指導員の対応一つひとつに意味づけをしながらかけて、サポートを続けました。約1年間をかけて、Aくんとその他の子どもたちは一緒に活動する術を何とか身につけています。

### 育ちの場としての放課後児童クラブ

放課後児童クラブでは、前述したようにテレビもゲームもなく、現代の社会事情では希少な場所であると言えるでしょう。さらに、様々な子どもたちへの対応を粘り強く続けられる指導員の方々のおかげで、前述の放課後児童クラブは子どもたちを預かる場以上の役割を担っているようにも感じられました。それは子どもたちの新たな育ちの場という可能性であり、これは地域で子どもたちを育むという流れにもつながるように思います。

このように考えてみますと、放課後児童クラブが、いかに貴重で様々な可能性を秘めているかがわかります。そこに臨床心理士が

関わり様々なサポートをするという事業は有意義であると言えるでしょう。学校と家庭の狭間にある放課後児童クラブへのサポートは、これからの新しい子育て支援のひとつの形であると思われれます。

### 県委託事業の意義と展望

臨床心理士として、小児科・精神科などで病んだ患者さんたちと関わり、また学校現場で、生きにくさを抱えた児童生徒と触れ合う時、乳幼児期以来の養育者（保育者も含む）との関係性のありようが浮かび上がってきます。長年人の育ちの原点への支援の必要性を痛感していたので、本事業の県からの委託は、千歳一遇のチャンスととらえられました。幸い、4件法による訪問終了時のアンケート結果は、毎年90%以上の高評価でした。さらに次のような自由記述の保育所からの生の声は、臨床心理士がこれからも大事にしていかなければならないエッセンスだと思われれます。

### 問題行動の背景にある家族関係への理解

初回訪問時には気になる子の乳児期からの育ちや、家族関係をみんなで話し合いました。これまで他機関からの巡回相談で「この子は多動児だから暴れた時は、強制的にクールダウンさせる」と指導を受け、そのように対応してきたのですが、子どもの暴言と多動は収まりませんでした。臨床心理士との話し合い

プは学校でも家庭でもない、子どもたちにとって特異な場であるとわかりました。学校から解放された放課後の子どもたちに学校のルールは通用しませんし、家庭のような叱られ方をすることもありません。子どもたちは素の感情をさらけ出しながら、ゲームもテレビもない場所で様々な学年が混ざり合っています。子どもたちの活発なやり取りは、ややもすれば、わがままで自己中心的な問題行動と感じられてしまい、指導員の方々は手を焼いておられることが多いようでした。

### 発達の特性があるAくん

小学校の特別支援級に在籍しているAくんは、放課後児童クラブで他校の小学生たちと一緒に過ごしています。特性の影響があり集団に馴染めないAくんと周囲の小学生たちとの間では、トラブルが頻発し対応は困難を極めました。同じような状況でAくんは、これまでに何か所かの放課後児童クラブから受け入れを断られた経緯がありました。しかし、今回の児童クラブの指導員の方々は粘り強く、特性のあるAくんに寄り添う支援と、他の子どもたちの様々な思いに耳を傾ける支援を続けられました。発達の偏りがある場合

の中で、子どもの行動の背景には、そうならざるを得ない家族の哀しみがひろがっていることに保育士は思いを馳せるようになりました。自然に可愛いがり直す関わりへと変化していき、子どもは保育士に甘えるようになり、落ち着いてきました。

気になる子どもから、すべての子どもたちに保育の質の向上を

保育所長として、気になる子どもについて相談を受け、保育士にアドバイスをしますが限界を感じていました。今回の事業で専門的な視点から話を聞かせていただき、たくさんのお気づきがありました。臨床心理士は保育士を優しく受け止め、悩みや意見を引き出し、適切にこたえてくださいました。参加者全員が、子どもへの視野を広げ、対応力を学べたと思います。子どもたち一人ひとりの育ちを見直し、日常の小さな成長を大切に認め伸ばしていきたいものだ、考えを新たにしました。

「大人の心の展開なくして、子どもたちの心の成長はない」（古澤、1986年）といわれます。子どもたちと大人（保育士・指導員・臨床心理士など）は相互に影響しあいながら、今を生きっていると、再認識しています。

引用・参考文献

古澤頼雄「見えないアルバム」彩子書房 1986

# 富山県「ハートフル保育カウンセラー派遣事業」の展開

伊東真理子・根塚明子 ● 富山県臨床心理士会 子育て支援・福祉担当理事

## モデル事業を受けけるまで

富山県臨床心理士会は、現在の会員数140名あまりの小規模所帯です。当会員対象の、地域子ども・子育て支援活動調査によると、①市町村保健所での1歳半・3歳児健診、②富山県家庭教育カウンセラー、③継続的な保育事例研修会への講師、④保育園・幼稚園での（保育）カウンセラー、⑤市内全保育所・幼稚園への巡回、⑥要保護児童対策（虐待防止）活動、⑦児童発達支援事業⑧家族再統合支援事業、⑨産前産後のうつ対策事業などに関与しています。

専門家としての力量を地域に認めてもらいながら、一歩一歩地道に職場を開拓してきた流れの中で、2010年から、「ハートフル保育専門アドバイザー派遣モデル事業」が始まりました。「保育カウンセラー（臨床心理士）が発達障害等の保育を行う保育所等を訪問し、『気になる子』等対応の困難な子ども把握、支援方法について、保育士等に対する専門的助言等を行う」という県からの要望に応え、新設の福祉担当理事が中心になって、保育士の子どもへの対応力の向上が目指され

には、先手を打って環境を調整していく対応が基本ですが、この児童クラブにおいて、Aくんと彼を取り囲む子どもたちへの対応は、現状の環境に子どもたちが折り合いをつけて合わせていく、そのような体験の積み重ねとなっていきました。

このように活動をされている指導員の方々に対し、派遣された臨床心理士は、Aくんをはじめとした子どもたちの言動の見立てを伝え、指導員の対応一つひとつに意味づけをしなから、サポートを続けました。約1年間をかけて、Aくんとその他の子どもたちは一緒に活動する術を何とか身につけています。

## 育ちの場としての放課後児童クラブ

放課後児童クラブでは、前述したようにテレビもゲームもなく、現代の社会事情では希少な場所であると言えるでしょう。さらに、様々な子どもたちへの対応を粘り強く続けられる指導員の方々のおかげで、前述の放課後児童クラブは子どもたちを預かる場以上の役割を担っているようにも感じられました。それは子どもたちの新たな育ちの場という可能性であり、これは地域で子どもたちを育むという流れにもつながるように思います。

このように考えてみますと、放課後児童クラブが、いかに貴重で様々な可能性を秘めているかがわかります。そこに臨床心理士が

## 子育て支援と全国の臨床心理士会

### 富山県臨床心理士会

ました。「支援シート」を使いながら「①子どもの行動観察を行い、②気になる行動が起る要因や仕組みを理解し、③一人ひとりの子どもにあった支援方法を協議する」という手順で話し合いを重ねました。また保育士に寄り添いながら、一方的にならないように配慮された助言を心掛けていたので、訪問先では好評を得ていたようです。

2017年にはモデル事業の枠がはずれ、ハートフル保育カウンセラー派遣事業と改名され、乳幼児期から学童期までを対象が広がりました。2018年現在、保育所17か所、放課後児童クラブ22か所に臨床心理士が訪問していますが、各施設のニーズに応えることを優先しているので、活動内容は訪問者の裁量にゆだねられています。現場で真に役に立つ仕事をするためには、本事業参加者同士の繋がりと学びを深めることが必須なので定期的に研修会を持っています。また、より複雑な事例に出会った場合は、他機関多職種と連携をとることも視野に入れています。

## 放課後児童クラブでの実際

この事業を展開する中で、放課後児童クラ

関わり様々なサポートをするという事業は有意義であると言えるでしょう。学校と家庭の狭間にある放課後児童クラブへのサポートは、これからの新しい子育て支援のひとつの形であると思われまます。

## 県委託事業の意義と展望

臨床心理士として、小児科・精神科などで病んだ患者さんたちと関わり、また学校現場で、生きにくさを抱えた児童生徒と触れ合う時、乳幼児期以来の養育者（保育者も含む）との関係性のありようが浮かび上がってきます。長年人の育ちの原点への支援の必要性を痛感していたので、本事業の県からの委託は、千歳一遇のチャンスととらえられました。幸い、4件法による訪問終了時のアンケート結果は、毎年90%以上の高評価でした。さらに次のような自由記述の保育所からの生の声は、臨床心理士がこれからも大事にしていかなければならないエッセンスだと思われまます。問題行動の背景にある家族関係への理解

初回訪問時には気になる子の乳児期からの育ちや、家族関係をみんなで話し合いました。これまで他機関からの巡回相談で「この子は多動児だから暴れた時は、強制的にクールダウンさせる」と指導を受け、そのように対応してきたのですが、子どもの暴言と多動は収まりませんでした。臨床心理士との話し合い

プは学校でも家庭でもない、子どもたちにとって特異な場であるとわかりました。学校から解放された放課後の子どもたちに学校のルールは通用しませんし、家庭のような叱られ方をすることもありません。子どもたちは素の感情をさらけ出しながら、ゲームもテレビもない場所で様々な学年が混ざり合っています。子どもたちの活発なやり取りは、ややもすれば、わがままで自己中心的な問題行動と感じられてしまい、指導員の方々は手を焼いておられることが多いようでした。

小学校の特別支援級に在籍しているAくんは、放課後児童クラブで他校の小学生たちと一緒に過ごしています。特性の影響があり集団に馴染めないAくんと周囲の小学生たちとの間では、トラブルが頻発し対応は困難を極めました。同じような状況でAくんは、これまでに何か所かの放課後児童クラブから受け入れを断られた経緯がありました。しかし、今回の児童クラブの指導員の方々は粘り強く、特性のあるAくんに寄り添う支援と、他の子どもたちの様々な思いに耳を傾ける支援を続けられました。発達の偏りがある場合

の中で、子どもの行動の背景には、そうならざるを得ない家族の哀しみがひろがっていることに保育士は思いを馳せるようになりました。自然に可愛いがり直す関わりへと変化していき、子どもは保育士に甘えるようになり、落ち着いてきました。気になる子どもから、すべての子どもたちへ保育の質の向上を

保育所長として、気になる子どもについて相談を受け、保育士にアドバイスをしますが限界を感じていました。今回の事業で専門的な視点から話を聞かせていただき、皆さんの気づきがありました。臨床心理士は保育士を優しく受け止め、悩みや意見を引き出し、適切にこたえてくださいました。参加者全員が、子どもへの視野を広げ、対応力を学べたと思います。子どもたち一人ひとりの育ちを見直し、日常の小さな成長を大切に認め伸ばしていきたいものだ、考えを新たにしました。

「大人の心の展開なくして、子どもたちの心の成長はない」（古澤、1986年）といわれます。子どもたちと大人（保育士・指導員・臨床心理士など）は相互に影響しあいながら、今を生きっていると、再認識しています。

引用・参考文献

古澤頼雄「見えないアルバム」彰古書房 1986